［第 22 回年次大会　基調講演　要旨］

配偶者の呼称「主人」の盛衰小史

遠藤　織枝

0．はじめに

世代を超えて「主人」追放の同じテーマが繰り返されるのはなぜかというテーマを与えられて、改めて戦後70年の新聞――『朝日新聞』「読売新聞『毎日新聞』の縮刷版を検索しながらその歴史を振り返ってみた。1950年代以降の「主人」関連の新聞記事を通読してみて気づいたのは、「主人」を言い換えようという問題提起の伝え方は、いつも以下のように展開されることであった。①主人は封建制度の名残だからやめよう。②今は主従の関係はなくなっているから使ってもかまわない。③符号として使っている。この３つの意見がいつも同じ比重で併記されていた。男女平等であるはずの世の中で従属関係を示すことばは使いたくない、という①の主張と、ことばを自分の生き方と結びつけることなく趣味的に考える②③の主張とは自ずから重さは違う。それなのに、新聞は３つをそれぞれ対等に並べて論じてきた。また、「主人」をやめようと言うと、自分の配偶者は「夫」で言い換えられても他人の夫を指す「ご主人」をどう言い換えるか、よい代案はないではないかという議論の立て方がされてきた。「ご主人」と抱き合わせに取り上げることで、「主人」→「夫」への言い換えにブレーキがかかる。こうした新聞世論が「主人」を温存してきたのではないか。

しかしながら、この70年間の社会変化、すなわち専業主婦が多数派を占めた時代から、女性が経済力を持つのが当然となった社会の変化の中で、主従関係を表す「主人」はさすがに使いにくくなってきた。本稿では新聞記事を渉猟しながら、こうした「主人」の消長とそれに伴う「夫」受容の経過をみ

Copyright © 2023 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.

ていく。その方法は以下のようである。

方法：各新聞社の電子資料「朝日新聞：クロスサーチ・フォーライブラリー」、「毎日新聞：毎策」、「読売新聞：ヨミダス歴史館」の、1950年１月１日～2022年10月末の記事を対象にして、キーワード「主人」で検索。その中の、配偶者の呼称を指す「主人」の記事約50件を抽出して、通時的に考察する。

新聞記事資料のほかに、「主人」に関する書籍やインターネット調査なども適宜交える。

表記：記事の見出しの引用部分はゴチック表記、引用文は［　］で番号をつけ、２文字下げて太文字とする。

地の文と下線は遠藤。新聞の日付は「『朝日』1975/01/01」のように記す。また、投書者名は、文脈上必要な場合を除いて省く。

１．戦前の配偶者の呼称の「主人」

明治期から昭和初期敗戦以前の新聞の調査の結果、

① 「主人」は、明治から昭和初期まで、「亭主」「良人」「姓で呼ぶ」「旦那」「宅」「宿」「夫」など多くの配偶者の呼称の中のひとつで、特に代表的・標準的とされる語ではなかった。

② 戦前の夫を指す「主人」は、社会的地位の高い夫婦の間で使われていた例がある。

昭和９年ごろの新聞の投書の中の使用率は、「夫」79％対「主人」20％であった。

③ 辞書で、「主人」の語に対して夫の呼称という語義を与えるようになるのは、和英辞書で1920年以降、国語辞書では戦後になってからである。（遠藤 1987：26-34）

新聞以外では、

④ 宝永年間（18世紀初頭）から1899（明治32）年までの各種「女大学」を集めた『女大学集』（平凡社東洋文庫 1977）を見ても、「婦人は別に主君なし。夫をまことに主君と思いて、うやまいつつしみてつかうべ

Copyright © 2023 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.

し」のような表現はあるが、夫そのものを「主人」と呼ぶ例はない。

⑤　明治期に人気を博した菊池幽芳の小説『己が罪』のヒロインは、「旦那様」「良人〔をっと〕」と呼ぶ。

⑥　大正デモクラシーの時期の都市の家庭を描いた佐々木邦のユーモア小説では、「文化生活」を営む若い妻たちは夫を「主人」と呼んでいる。（荻野 1992：12-14）

など、戦前までの新聞・雑誌・小説では「主人」が夫の呼称の代表的存在であるというような事実はなかった。戦後になっても目上の人に対しては「主人」でなく「姓」を言うのが正式な言い方とする識者もいた。1952年の『読売』のコラム「エチケット集」では、読者からの夫のことを他人にどう言えばいいかの質問に以下のように答えていた。

［1］［問］：**夫のことを他の人に話したり、手紙に書く場合「うちの主人が…」といつておかしくありませんか。敬語のようにも思いますが…。（古沢みはる）**

［答］：**「主人」というのが、一般的ですが、目上の人に対しては、苗字を呼ぶのが正式です。貴方の場合だつたら「古沢が…」といゝます。（前田菊子）『読売』1952/04/18**

2．圧倒的多数の妻が、夫を「主人」と呼ぶ

1955年の第1回母親大会で、評論家丸岡秀子は配偶者を「主人と言わず、夫と呼びましょう」と提唱した。ということは、戦前多くの呼称のひとつであった「主人」が、戦後10年を経たこの時期では民主化の時代にふさわしくないにもかかわらず多くの妻たちが使っていたことを示している。戦後「主人」を使う人が増えたのは、①戦前は、女中や召使いにとっての「主人」が現存したため、夫を指すのか雇い主を指すのかわからない場合もあったが、戦後になって女中のような家庭内に同居する労働者は激減したため、夫を「主人」と呼んでも誤解されることが少なくなった。②戦前、モダンな文化生活の中で夫が「主人」と呼ばれ、有名な教授夫人など上流の女性が夫を「主人」と呼んでいたのを真似て、少し憧れをこめて使ったのではないか、などの理

Copyright © 2023 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.

由が考えられる。(遠藤 2006)

２－１　1970年代

1973年５月23日の『朝日』には、**難しい「主人」追放、 対等主張したいけど / 語呂悪い代わりのことば**の見出しのもとに大きな記事が載っている。大阪府の主婦・角野久恵の投書がきっかけとなっている。角野は、日常生活の中で使いたくないことばは「うちの主人がね」であると言い、

［２］「主人」――**辞書にはそのひとつとして妻が他人に対して夫を言う称と載っているが、私にはあとのふたつ、「客」に対するあるじ、主従関係におけるだんな、どうもそれらの意味の方が強く感じられてしまうのだ。「主人」――語感がきつい。カミサン同士の日常茶飯の会話の中の「主人」は冷たくて気取ってて、なんだかとけこめないような気がする。**

と、主従関係を指す語であることと、その語感のきつさから使いたくないという趣旨である。この投書を受けて記事では、「主人」の語の使われ方を知るための調査をしている。

調査は大阪府立消費生活センターの講習会に集まった20代から60代の女性60人に対するアンケートによるもので、改まった場で夫を何と言うかを聞いた結果は、図１のグラフの示すように、「主人」が圧倒的に多くて80％を占めていた。続いて、記事は「主人」の使用についての考え方を紹介していく。

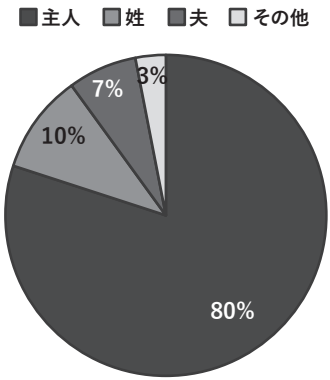

図1. 改まった場合の呼び方 (1973)

１．たかがことばの問題。そんなに目くじらを立てることもあるまい。ことばは一種の符号。

２．国立国語研究所第一研究部長野元菊雄さん「そんなこといったら、夫妻という言葉だって頭に夫がつくからけしからん、ということにならないかなあ」

Copyright © 2023 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.

3．言語学者の寿岳章子さん（京都府立大教授）「商店や町工場などにはまだ主従関係を意味する主人ということばが生きている。あるじを連想することばである以上、女性史的立場からみて、これを使うことはやはり問題ですね」、などであった。

1．の考え方は、自分は夫と対等で「主人」とは思っていないが、単なる記号だからかまわないというもので、一部の女性の意見としてこの問題を論じるときに必ず出てくる意見である。2．は、「主人」のことばを避けたいという投書に対して正面から答えることなく、「夫妻」の字の順を持ち出して「夫」を後にすることはできないと問題をそらしてしまっている。3．は、女性史の観点からみて「主人」の使用には否定的なコメントを出している。

記事は進んで、

［3］**ところで自分の夫は「夫」と呼ぶとしても、他人の夫はどう呼べばいいだろう。［…］「だんなサン」「ご亭主」では「ご主人」と同様、上下関係の意味合いが残る。とすると「ご夫君」「おつれあい」「夫サン」などが候補にのぼるが、どれも使い慣れてないから語呂（ごろ）が悪かったりしてしっくりこない。**

と続く。自分の夫を「主人」と言いたくないという投書に対して、相手の配偶者の呼称を持ち出して、その言い換えが難しいため「主人」を追放するのは難しいとしている。

同じ年の『読売』には、**「主人」に代わる言葉ないかしら**の見出しで、平等であるべき夫婦の中に「主人」のような言葉を持ち込むのは言語道断であるとの投書も掲載されている。

［4］**「私の主人が……」といった場合、彼女は全く夫の従属物であるかのごとく聞こえる。たとえ実際にそうではなくても、「主人」という言葉がそう思わせるのだ。［…］そのような言葉を、平等であるべき夫婦の中へ持ち込むなど言語道断であると思う。（20代女性）『読売』1973/11/27**

こうした正論が時に新聞に載ることはあっても、「主人」の勢いは衰えを見せない。2年後の『読売』は、**マスコミ差別／「主人」は困ります／市川さんら NHK に24項目談判**の見出しで市川房枝らのＮＨＫへの要望を大きく伝

Copyright © 2023 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.

える。

［５］**市川房枝参議院議員らを発起人とする「国際婦人年をきかっけとして行動を起す女たちの会」の婦人たちが、東京・渋谷のＮＨＫで、小野吉郎会長ら幹部と会見、「放送における女への差別をなくして下さい」と１時間余りヒザづめ談判し、NHK に対する要望・質問状を手渡した。［…］なお、女性たちは「NHK を手はじめに、マスメディアにおける女性差別をなくすため、民放、新聞の各方面を回る」と気炎をあげている。**

要望から、おもなものを拾うと ──。

▽ニュースは男性アナの担当という意識を与えているようだし、男女ペアの司会の場合、女性はいつもアシスタント。男女対等に［…］▽ドラマの中の女性像は家庭的で従順な女性のイメージが強い。もっと積極的に生きる女性を［…］▽女性差別の言葉を改めてほしい。たとえば、主人→夫、つれあい、配偶者。ご主人様→ご夫君、おつれあい様。嫁に行く、もらう→結婚する。籍を入れる→婚姻届を出す。父兄→父母、保護者。『読売』1975/09/24

市川たちは当然の要望をしているのだが、当時の新聞は「市川さんらＮＨＫに24項目談判」「１時間余りヒザづめ談判し」「気炎をあげている」と、半ば嘲笑と揶揄の目で伝えていた。

２－２　1980～90年代

1985年に遠藤はサラリーマン家庭の妻122名へのアンケート調査で改まった場合と、くだけた場合に夫をどう呼ぶか尋ねた。結果を以下の図２、図３に示す。くだけた場合にはやや少なくなりはしたが、全体として「主人」が圧倒的に多い傾向は変わっていなかった。

1999年の文化庁の調査でも、「主人」絶対的優勢は変わらない。（図４）

この時期の投書をみる。やはり「主人」温存派と否定派がそれぞれ掲載される。

Copyright © 2023 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.

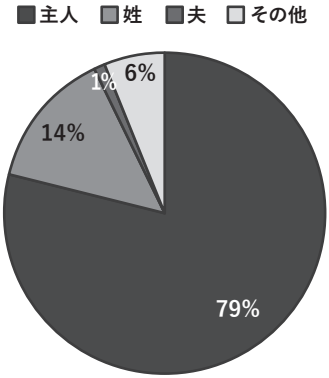

図２．改まった場合の呼び方（1985）

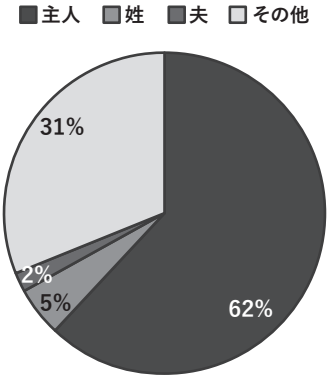

図３．くだけた場合の呼び方（1985）

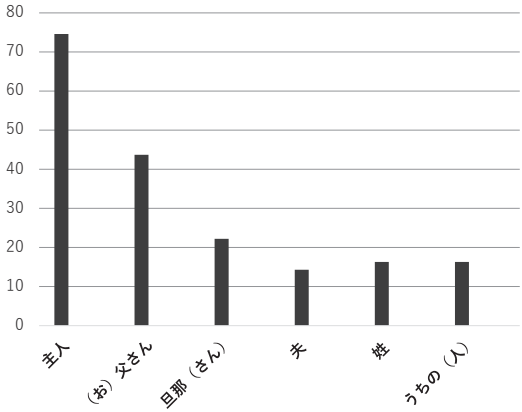

図４．文化庁調査（1999複数回答）

［６］男尊女卑など、ちょっと考え過ぎのように思います。我が家では、昔のような「女のくせに」などと言う考え方は一切ありません。だからこそ、自然に主人を立てるようになっていると思います。（20代女性）『読売』1991/8/3

［７］世間の慣習とはいえ、従属関係を無言で強いるような「主人」なんて言葉は、口が裂けても言いたくなかった。［…］最近は、［…］友だちの夫は「○○さん」と名字で呼ぶことにしている。［…］仕事の席な

Copyright © 2023 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.

どで、その配偶者が話題になったときは、ちゃんと「ご主人」「奥さん」と言っている。それくらい笑って言えなきゃ仕事はできませんって。（フリーライター 蒲生あつ子）『毎日』1997/11/6

２－３　「主人」と「夫」の語感

投書やインタビューの中で述べられている「主人」「夫」の語感についてまとめておく。

「主人」

- 「主人」—語感がきつい。カミサン同士の日常茶飯の会話の中の「主人」は冷たくて気取ってて、なんだかとけこめないような気がする。（角野久恵）『朝日』1973/5/26
- 「主人」の方が「夫」よりも自然でやわらかい感じがする。『朝日』1987/2/18
- 自分の主（あるじ）は自分であり、これはこのみの問題で、私は普通に「主人」と言う。（70代女性）『毎日』2002/4/12

「夫」

- 「夫」では下に「どっこい」とつけられそうで［…］（30代女性）『読売』1954/9/14
- 話し言葉で「オット」というのはゴロが悪い。（40代女性）『朝日』1973/6/6
- 文章に書く場合は別として、話し言葉の中での「夫」は、どうも堅苦しい。（60代男性）『朝日』1987/6/11
- 「夫さん」だとオットセイみたいだ。（羽生槇子）『朝日』1992/6/28

「主人」は、語感がきつい、冷たい、気取っていると感じる人がいる一方で、自然で柔らかい、響きが美しいと、まるきり逆の印象を持つ人がいる。「夫」は「おっとドッコイ」「オットセイ」などふざけた感じを持つ人もいるし、語呂が悪い、すっきりしない、堅苦しいと否定的な印象を持つ人がいる。

Copyright © 2023 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.

３．「主人」衰退にむかう

３－１　「主人」は前時代の遺物

2000年代になり、ジェンダーギャップなどが頻繁に取り上げられるようになると、新聞記事の論調も変わってくる。両論併記ではなく、「主人」否定だけを打ち出したり、夫のことを自分が「ご主人」と言われて不快感を示す妻の意見が載るようになる。

「主人」に抵抗する気概を持てと、教育学者の汐見稔幸は「主人」と呼ぶ女性を叱咤する。

［８］**男女共同参画の学習会などに出てくる女性が「うちの主人は……」などと言うと「ちょっと待ってください。あなたの夫が主人だとしたら、あなたは召使いか何かですか」と意地悪く聞き返すことがある。たしかに私も「あなたの夫はそういうときどうするのですか？」というような言い方に抵抗を感じることがある。［…］それよりも「あなたのご主人はそういうとき……」の方が無難だ。けれども、やはり私は「あなたの夫は…」という言い方を貫きたいと思っている。「うちの主人は…」という言い方は、冷静に考えれば前時代の遺物だ。それに抵抗する気概を持たないでは、男女共同参画社会も建前だけにとどまる。『毎日』2002/3/29**

37歳の東京の女性は**パートナーは「主人」と違う**という。

［９］**以前、私の職場に夫から電話があった際「ご主人から電話です」と取り次がれた。それまでは夫の姓で「○○さんから」と言ってくれていたのに、突然「ご主人」と言われてイヤな気分になった。そこで「わが家の主人は私なんですよ。ハハハ…」と笑い飛ばしたらその場がシーンとなった。［…］昨年、政府の世論調査で「選択制夫婦別姓」導入に対して、初めて賛成が反対を上回ったと聞く。［…］パートナーを「主人」と呼ぶのはそろそろやめよう！（30代女性）『朝日』2002/9/18**

「選択制夫婦別姓」も賛成が過半数を占めるようになり、別姓制度も実現しそう、実現すれば「主人」の形骸化も進むだろうと期待しての投書だった。その後20年、世間の趨勢は圧倒的に別姓賛成に傾いてきているのに、一部保守

Copyright © 2023 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.

派議員の強い抵抗で実現していない。

３－２　「主人」が減り、「ダンナ」が増えてきた

『朝日』2006/10/26は「日本言語研究所」の約2400人へのアンケート調査の結果を報じている。その結果、話し相手が目上の場合（図５）は配偶者のことを「主人」とよぶのは68％だが、話し相手が目下の場合（図６）、配偶者を「だんな（さん）」と呼ぶのがいちばん多くて29％で、「主人」の21％を超えている。

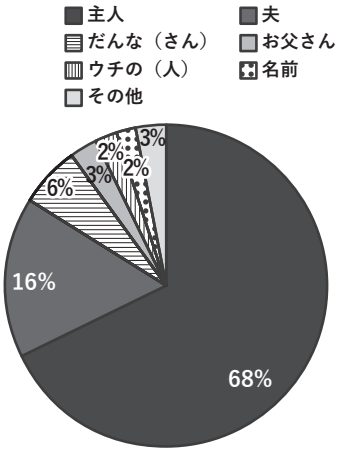

図５．話し相手が目上の場合（2006）

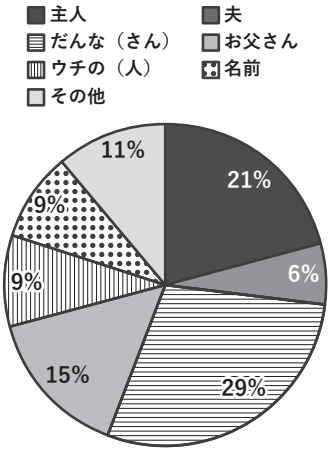

図６．話し相手が目下の場合（2006）

社会が「主人」と呼ぶのを減らすために、NHKに「主人」と呼ばないよう提案する人や、男女平等の社会を実現するために長年の隠れた意識を問い直すべきとの投書もあった。

［10］夫婦は平等である。そろそろ夫を主人と呼ぶのはやめたいものだ。が、いったん社会に根付いた言葉は中々改変できるものではない。そこで、提案したい。マスコミが言葉遣いを改められないだろうかと。［…］NHKに率先して夫を主人と呼ばない言葉遣いを確立しほしいものだ。（40代女性）『朝日』2008/9/6

Copyright © 2023 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.

［11］**言葉に秘められた旧態依然たる意識が問題だ。日常のちょっとした変革の積み重ねが社会を少しずつ好ましい方向に変えていくと思う。本当の意味で男女平等社会にしていくには、無意識の奥にある長年の慣習を打ち破る必要がある。（70代男性）『朝日』2014/4/1**

一方で、**四角四面の言葉遣いは味気ない**と、ことばづかいに問題を矮小化する投書もある。

［12］**戦前の「家制度」を思い起こすからと書いておられるが、こだわりすぎだと思う。［…］私の場合、会話では「主人」と呼び、手紙では「夫」と書く。［…］その場に応じた言葉を大切にする奥深さを感じる。四角四面に言葉遣いを考えると味気ない世の中になると思う。（70代女性）『朝日』2015/7/8**

［10］［11］は、夫婦の関係を平等にし、男女平等社会にするために、生き方や考え方の問題として「主人」をやめようと言う。それに対して、［12］はことばづかいの問題に終始している。この両者は本来次元が違うものだが、新聞はいつも両者を並べて載せてきたため、結果的に、新聞自身は「主人」追放に対して傍観者的態度を取り続けているように見える。

３－３　妻たちは「夫」と言うようになった

「夫」は受け入れにくいとされてきたが、時を経るにつれて「夫」と呼ぶ妻たちが増えて来た。「主人」の語の封建性やアナクロニズムに抵抗感を抱きながらも、周囲に流されて「主人」を使い続けてきた妻たちの自己変革だった。

［13］**対外的に「夫」と抵抗なく言えるようになったのはここ十年来。それまでは「夫」と「主人」を迷いながら使っていた。社会の変化と、私も収入を得られるようになったことが、心を押してくれたと思う。（40代女性）『読売』1996/3/23**

［14］**16年前に結婚して特に意識せずに「主人」と呼んでいたが、徐々に違和感を感じ始めた。「夫が主人なら私は召使？」そんな時、周りの人が「夫」と呼んでいるのを聞いて、自分も10年ほど前から使い始めた。（40代女性）『朝日』2006/10/22**

［15］**若いころは周りをまねして「旦那」「主人」と 言っていたが、しっく**

Copyright © 2023 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.

りこなかった。今はどんな場合も夫と呼ぶ。すっきりした気持ちだ。（70代女性）『信濃毎日新聞』2022/3/2

［13］は、まさに社会の変化と女性の経済力がことばの変革につながることを証明している。今までの妻たちは経済力がないために、不本意ながらも夫に従わざるを得なくて、「夫＝主人」意識が払拭できなかった。［14］［15］は、周囲の人の使うことばの影響が大きいことを示している。両者とも周りの人に合わせたり、まねをしたりして「主人」と言っていた。［14］は周りの人が「夫」と呼んでいるのを聞いて自分も「夫」と言うようになった。特に［15］は周りの真似をして「主人」といっていたがしっくりこなかった、「夫」と呼ぶようになってすっきりしたと晴れやかに言い切っている。

これらの投書から、周囲つまり社会の作用がいかに大きいかがわかる。社会が「主人」を求めている時代には妻たちはそれに応じていた。でも対等であるはずの夫を「主人」と呼ぶことにしっくりこなかった妻たちは、周囲が「夫」と言い出せば直ぐに「夫」に変えた。

もうひとつわかるのは、語呂が悪いなどの語感は、ことばを変えるにあたってはさほど力を持たないことである。「主人」を避けて、より現実に合うことばを使いたいと逡巡した結果に身につけた「夫」は、最もすっきりしたことばになって、従来の語感を追い払ってしまっている。

３－４　「主人」の牙城くずれる

2017年12月１日の『読売』は**配偶者の呼び名「40代」境に二分**と見出しをつけて調査会社インテージリサーチの調査結果を報じた。20代～60代の男女１万人を対象にインターネットで「親しい人の前で配偶者を何と呼ぶか」を尋ねたところ、女性の50～60代は「主人」がトップ、20～40代は「旦那」が最多だったという。つまり、40代を境にしてトップになる呼び方が異なり、若い世代では「主人」よりも「旦那」の方を多く呼ぶようになっているのである。全年代合計の呼び方（図７）では、「主人」が23.4％で首位になっているが、２位の「旦那」22.9％との差はわずかである。

同じ2017年に水本（2017）の調査がある。水本の Facebook を通じた186人を対象にして「親しくない人の前で」どう呼ぶかを問うたものである（図８）。

Copyright © 2023 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.

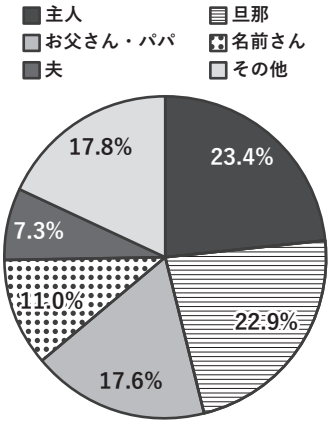

図７．親しい人の前で（2017）

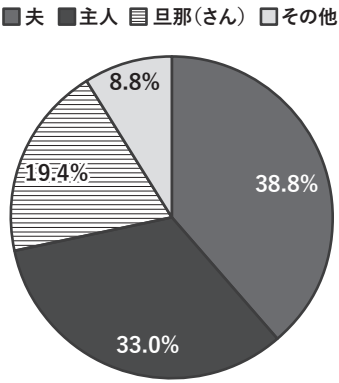

図８．親しくない人の前で（2017）

「親しくない人の前で」なので、図７とは比較できないが、2006年の図５の「目上の人の前で」の結果と比べてみる。図５では「主人」が68%、「夫」が16%、「だんな（さん）」６％であったので、図８では大きく様変わりをしていることが見て取れる。「夫」が最も多く、「主人」は２位に下がっている。今までの調査の中で、初めて「夫」がトップに立った例だが、これは［13］～［15］の投書でみた、『夫』と呼ぶ妻たちが増えたことと相関関係にあると言える。

「主人」の勢いが衰えるにつれて、「ダンナ」が勢いを増し、2006年の図６では目下の相手に言う場合はトップになり、2017年の調査の20～40代の回答で最多になった。「主人」と「ダンナ」の交代である。「主人」の後釜として「ダンナ」ならいいのか、の問いがまだ残っている。

［16］これは古くはサンスクリット語の dãnapani を語源とし、「布施」「施しをする人」という意味で一見問題なさそうではある。しかし、後に奉公人が主人を呼んだり、女性が生活の面倒を見てくれるパトロンを呼んだりする際にも使用されてきた歴史を考えると、主従関係を含有する語として「ご主人」と同等であると考えられる。（水本2017：13）

［17］夫の呼称として「主人」の代わりに用いられることのある「亭主」や

Copyright © 2023 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.

「旦那」も元来は「主人」と類似の意味合いを持っていた語だが、現在では上下関係を表す場面で使用されることはまれになっている。「主人」とは言いたくない人がこれらの語にたいしてはあまり抵抗感なく使用しているのは「ダンナ様というほうが現実から離れる感じがあって面白いのよね」* ということばが示すように、これらの語にかんしてはすでに意味の空洞化が進み、その結果一種の滑稽味さえ帯びるようになっているからである。*雑誌『クロワッサン』79の中の34歳の PR 誌ディレクターの話。(荻野 1992：17)

たしかに「ダンナ」の語源はサンスクリットの「施主」の意味であり、貧者に施しを与える上位の人物で、対等な関係を表す語ではない。その意味で、「主人」の代替語としてふさわしいことばとは言えない。しかし、「主人」と比べると、①「主人」より語源意識は薄い。特に「ダンナ」と表記されることが多いため、語義は意識されず形骸化されている、②「主人」に比べて軽みや滑稽味がある、そのため、上下関係が薄れ、夫との関係が対等に近いものであることを示すことができる、などの点が異なる。なによりも、「主人」は実情にそぐわない、「主人」は使いたくない、と考える人の次善の策としての使用であると考えられる。

３－４　「夫」が半数を占めるに至る

2010年代以降、新聞も LGBTQ などの人権尊重を頻繁に取り上げ、ジェンダーの視点で呼称を考えるようになると「主人」擁護派の意見は少なくなる。『毎日』2021/3/1は、「夫」「妻」が一般的になることは男性優位と女性蔑視が見直される時というジェンダーの視点からの男性の投書も載せている。

［18］**東京オリンピック・パラリンピック組織委員会の会長として森喜朗氏が［…］行った発言が、女性差別だと問題になったが、女性に対する差別発言は今に始まったことではない。［…］私は常々気になっていることがある。日常生活の中でほとんどの人が無意識のうちに口にする「うちの主人」「私の家内」という表現である。言葉は文化といわれるが、「夫」「妻」が一般的になった時が男性優位、女性蔑視の風潮が見直される時になると思う。(70代男性)**

Copyright © 2023 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.

『読売』2021/ 3 /30 は**「主人」減り「夫」増加　背景に女性の社会進出**と見出しを立てて、「主人」と呼ぶ人が減り「夫」と呼ぶ人が増えている変化を伝えている。元 AKB48 メンバーの佐藤亜美菜さんが 2 年前に結婚した男性を「夫さん」と呼んでいること、保育事業を手がける NPO 法人「フローレンス」が 4 年ぐらい前から職員の間で「主人」を「夫」や「パートナー」に言い換えていること、女性向けファッション誌も「ご主人」と表記していた読者の配偶者を、「夫」と記載するようになったことを伝える。

［19］　**総務省の統計によると、共働き世帯数が、専業主婦のいる世帯数を初めて上回ったのは1992年。その後しばらくは両世帯の割合が拮抗してきたが、2000年以降は専業主婦世帯の減少傾向が進み、差が開き始めた。18年には初めて、専業主婦世帯が共働き世帯の半分以下となった。**

生活史研究家の阿古真理さんは、男性の賃金が必ずしも年功序列では上がらなくなる一方、女性の有職率が増えたと指摘。「男性はかつてのように一家の大黒柱となり得るだけの給与をもらえなくなり、女性に『自分も家計の担い手』という意識が芽生えた。主人という言葉は時代にそぐわなくなったのだろう」と話す。

このように、従来の、「男性＝一家の大黒柱＝主人」の図式が、共働き世帯が増え、男性の賃金が年功序列で上がらなくなり家計が分担化したことで、大きく崩れたこと、こうした社会構造の変化が「主人」の減少を促していると伝える。経済的社会的変化に伴う「主人」衰退である以上、この趨勢は確かなものであろう。この事情を最近の調査で確認しておく。

図 9 は雑誌『VERY』が、2020年に SNS で200人の読者に対して行ったアンケートの結果である。家以外で配偶者をどう呼ぶか尋ねた結果、あだ名や

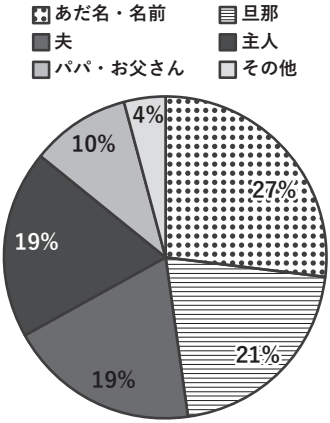

図 9．家以外での配偶者の呼び方（2020）

Copyright © 2023 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.

名前で呼ぶが最も多く27％、次が「旦那」21％、３番目が「主人」と「夫」で19％であった。ここでは、「主人」の衰退と同時に、「あだ名・名前」が最多を占めるという、従来の親族呼称による呼び方から個人名で呼ぶ人の増加という新しい傾向がみられる。

もうひとつ、図10は『日経xwoman』が2021年、23歳～73歳の164人に対して「第三者に話をしているときに、パートナーのことを何と呼びますか」と尋ねた調査の結果である。最も多かった呼び方は「夫」で50％、次は「旦那・旦那さん」の25.6％、そして、「主人」は9.1％という少数派に転落したことを知らせている。遂に「夫」が「主人」をはるかに凌駕し、半数を占めるに至ったのである。半数が「夫」と呼ぶということは、語呂が悪い、堅すぎるなど、今まで言われてきた「夫」に対する抵抗感が払拭された結果とみていいだろう。

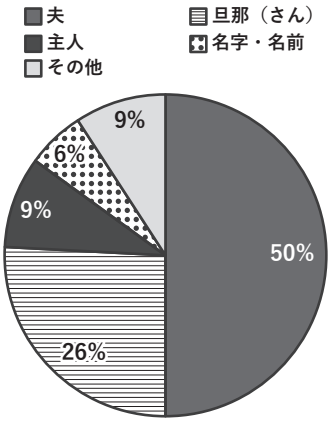

図10．第三者にいうとき（2021）

新聞は折に触れて、「主人」と「夫」のそれぞれの語感や印象を記事にし、ことばを変える主張は、あたかもことばの奥深さを破壊する暴挙であるかのような投書も載せてきた。しかし、そうした語感や印象による抵抗感は、経済や社会変化によることばの変革の妨げにはならなかったことも明らかになったのである。

４．構造的差別としてのことば

４－１．コーヒー店店主妻夫の差別とのたたかい

『朝日』2022/3/8と『毎日』2022/6/26は、京都でコーヒー店を営むカップルのことばや表現の差別との戦いの実践例を伝えている。『朝日』は、**「妻」→「夫」の順で名前掲載を　コーヒー店妻夫**[1)]**の願い**という見出しをつけて報じた。２人がメディアに依頼したのは、

Copyright © 2023 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.

［20］　**共同で事業を営んでいるにもかかわらず、「夫である佳太さんがメインの経営者」ととらえられることがあまりに多かったからだ。**

取材者が名刺を渡したり、銀行などの営業担当者が話しかけたりするのは、まゆみさんではなく佳太さん。［…］２人で店を始めることを決めたにもかかわらず、「夫がやりたいと言い、妻が許した」という前提で取材されたこともあった。［…］女性だからと不当な扱い扱いを受けているモヤモヤを徐々に佳太さんに話すように。２人で話し合い、取材や営業などに対応する際はまゆみさんが話すことに決めた。［…］２人は「男性がメインだという構造を助長したくない。できることからやっていこう」と今回の対応を決めた。佳太さんは「自分が差別しないだけじゃなくて、差別に反対しなくちゃいけないんです」と話す。『朝日』2022/3/8

という事情があった。まゆみさんのモヤモヤは多くの女性が常に体験していることで、それを言語化してメディアに直接呼びかけた、それが「差別に反対する」ことだったのである。

『毎日』2022/6/26は**「主従」ひそむ言葉にあらがう**の見出しで、「夫が上、妻が下」「夫が外、妻が内」の意味が潜む呼び方は避けたいとする妻夫のことば使用の意識を紹介する。

［21］**夫婦の呼び方にも、社会のジェンダーギャップに一石を投じたいという２人の思いが反映されている。［…］夫婦の呼称の問題は過去に何度も報じられてきた。本来の意味を意識せずに使う人も少なくないため、問題視すること自体が「言葉狩り」という批判もある。だが佳太さんは言う。「構造的差別の表れであることは間違いない。全体で見れば小さいことですが、一つ一つ変える必要があると思うんです」**

と、本来の意味を意識せず使うという次元よりもさらに進めて、最も根源的である「構造的差別」に到達している。そうなると「言葉狩り」批判も超克できる。「主人」の語を女性が使い、使わせられているのは、女性の置かれた歴史と社会構造によるものであることを看破した発言であった。

Copyright © 2023 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.

４－２　他人の配偶者をどう呼ぶか

「主人」は退路がみえてきたが、相手の配偶者を呼ぶ「ご主人」の追放は途上である。自分の配偶者は「主人」を「夫」に言い換えられても、相手の配偶者の「ご主人」に代わることばがない、どうするか、困りましたねー、で終始していた。その際、いつも配偶者の呼称は「ご主人」が最もふさわしいとの前提で進められてきた。実際のところ、「ご主人」が最もふさわしいのだろうか。３－１では［９］**「ご主人」と言われてイヤな気分**という投書も紹介したし、80年代にすでに以下のような事例も載っている。

［22］**「ご主人、お元気？」新婚早々の若い友人に久しぶりに会い、ごく平凡なあいさつをした。と、「やめてよ、ご主人なんて」。すごい剣幕で怒鳴られてしまった。「カレは夫であって、私の主人なんかじゃないのよ、断然！」（30代女性）『朝日』1980/6/18**

配偶者のことを「ご主人」と呼ばれていやな気分になったり、憤慨したりする人がいる、つまり最もふさわしいとは限らないのである。そういう事情を踏まえたうえで、「ご主人」に代わる呼称について考えてみる。

［23］**「ご夫君」「おつれあい」「夫サン」などが候補にのぼるが、どれも使い慣れてないから語呂（ごろ）が悪かったりしてしっくりこない。『朝日』1973/5/26**

［24］**市川らのNHKへの申し入れ：「ご主人様→ご夫君、おつれあい様」『読売』1975/9/24**

これらのほかに、先に引用した［８］では「あなたの夫」があった。「ご主人」以外の相手の配偶者を呼ぶ語の候補として、「ご夫君」「おつれあい」「夫サン」「あなたの夫」が挙がっているが、ここでも「しっくりこない」「語呂が悪い」と、否定的な印象が添えられている。この中の「夫さん」について、寿岳章子は早くからその使用例を聞き取っていた。

［25］**ある頃から彼女たちは「主人」と言わなくなった。そして、「夫」をつかいだしたのである。聞いてみると「主人」というのはおかしいのとちがうか、と誰ともなく言いかわしはじめた。そしてそれなら何と言うか、「夫」というのがある、ということで「主人」をやめたというのである。［…］自分の配偶者に関しては「夫」でよいが、他**

Copyright © 2023 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.

人の夫はどうする？さて……さまざまの話し合いの結果、きまった。「夫さん」にしよう。［…］実はその頃、私はもう一つまったく別のグループの人たちがやはり「夫さん」を使っているのを知った。兵庫県宝塚市の女性たち[2)]である。［…］そのリーダーの話をある会で聞いた時、その人は「私たちは［…］ハンストに入りました。仲間たちと共に。夫さんたちも妻の行動をよく理解して応援にかけつけてくれました」とスルッと言ったのである。［…］もうその人たちは平気で、かなり以前から「夫さん」を使っていたのである。（寿岳1998：158-162）

初めの例は京都の丹波地方の農村の女性たちのもので、「ある頃」とは寿岳がそこに通っていた1970年代である。ふたつめの例の彫像設置反対運動は1978年に起きた（読売新聞オンライン）。つまり、70年代に丹波地方と宝塚市で「夫さん」が使われていたのである。

新聞は、他人の配偶者の呼び方のサンプルを求めている。オススメを拾いあげる。

［26］**三省堂国語辞典編集委員の飯間浩明さんのおススメは、「『ご主人様』『奥様』という言い方に違和感を持つ人と話す時のためにいくつか別の呼び方を用意しておくといいでしょう」とアドバイスする。オススメは「お連れ合い様」［…］文章で相手の夫を示すのであれば「ご夫君」もいい。『読売』2021/3/30**

［27］**［…］しかし「パートナー」もやはり目上の人の配偶者を指しては使いづらい。でも、そんな時は「パートナーの方」にすればいい。（20代男性）『朝日』2022/1/19**

「ご主人」を避けるための悪戦苦闘が展開されるのであるが、まず、相手の配偶者が「ご主人」にふさわしいかどうか疑ってみるステップがあってもいいのではないか。A 子と話している。その配偶者が話題になる。A 子とその配偶者との関係が「ご主人」に当たるかどうか、である。主人と思っていない A 子には「ご主人」はふさわしくない。「田中さん / マコトさん」とか「カレ」とか「お連れ合い」とかがふさわしいはずだ。「ご主人」と呼ぶのが適当と思う関係の場合は、「ご夫君」とか「お連れ合い様」とかを選べばいい。「ご主

Copyright © 2023 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.

人」絶対主義からまず抜け出すことだ。代替語はひとつに限らない。いくつでもいい。要は「ご主人」を使わないことだ。「ご主人」に代わる語がないから使い続けるのではなく、「ご主人」は適当ではないから使わない、これがスタートだ。

5．たかがことば、ではない

ことばの言い換えが問題になるとき、「ことばだけ変えても実質は変わらない」「ことばは些細な問題だ、大本を変えなければ事態は変わらない」など、ことばの力を否定的に見る意見が出てくる。逆に、身の回りの小さなことばから代えていこうということばの力を高く評価する声もある。ここでは、こうしたことば観を拾い上げてみる。

［28］**平等意識を身につけていけば、自然に「ことば」を大切にしますよ。「ことば」の問題なんて小さな事だと片付けるのは、差別システムを見てない人の弁ですね。「女は化粧にスカート」が女の格好を作り、1年365日の飯炊き。これは一見小さなことにみえますが、大きなことです。子細なことの積み重ねが、大きな意味を持ってきます。（駒尺喜美）（福田 1993：21）**

［29］**「たかが言葉、されど言葉。言葉の影響力には敏感であるべきです」と北九州立名誉教授で日本語ジェンダー学会理事水本光美さんは言う。『毎日』2022/6/26**

［30］**NPO 法人「フローレンス」の駒崎弘樹代表理事は「小さなアクションの積み重ねが、誰もが自分らしく暮らせる社会につながっていく。身近な言葉から変革を始めていきたい」としている。『信濃毎日』2022/3/2**

個々のことばは小さくて無力に見えるが、それらの積み重ねが人々の言語生活を築き上げ、その生活が社会に繋がっていることはいまさら言うまでもないことだ。

Copyright © 2023 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.

6．まとめ

1950年代から70年間の新聞記事をたどって、「主人」使用の全盛期から衰退期までを見て来た。70年間の社会・経済の構造変化が「主人」不使用の傾向を決定的なものにした。この間に浸透してきたジェンダー平等意識が「主人」衰退を牽引した。一方で「ご主人」をどう衰退させるかの課題が残っている。まず「ご主人」絶対主義をやめることだろう。時には主語ナシでもいい。要するに「ご主人」の語を使わないことだ。

そう、ことばを使うものとしてことばの使用・不使用に主体的にかかわること、より自覚的になり、より敏感になり、自分のことばに責任を持つことだ。不本意だけれど大勢に従うのではなく、不本意なことばは使わないことだ。「主人」の盛衰の歴史を目の当たりにしながら、社会がことばを変え、ことばが社会を変えるダイナミクスを確認できたことは望外の収穫であった。

[注]

1）「夫妻」の間違いではない。「妻」が先に来る「妻夫」の語が、「夫妻」と同じ意味の語として大型の漢和辞典に採録されている。

2）宝塚大橋の欄干に置かれた彫像が女性差別的であるとして撤去させる運動をした。

[参考文献]

宇佐美まゆみ（1997）『言葉は社会を変えられる　21世紀の多文化共生社会に向けて』明石書店.

遠藤織枝（1985）「配偶者を呼ぶことば「主人」をめぐって」『ことば』6号現代日本語研究会，20-49.

遠藤織枝（1987）『気になる言葉　日本語再検討』南雲堂.

遠藤織枝（2006）「上流層の言葉　戦後広まる」『朝日新聞』10月22日.

荻野美穂（1992）「『主人』の考現学 ── 日本語における夫の呼称について ──」『女性学年報』13号　日本女性学研究会　11-24.

寿岳章子（1979）『日本語と女』岩波書店.

寿岳章子（1998）『ひたすら憲法』岩波書店.

新聞労連ジェンダー表現ガイドブック編集チーム（2022）『失敗しないための ジェンダー表現 ガイドブック』小学館.

福田真弓（1993）『女から見た男の呼び方　「主人」ということば』明石書店.

水本光美（2017）「他人の配偶者の新呼称を探るアンケート調査：「ご主人」「奥さん」から

Copyright © 2023 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.

「夫さん」「妻さん」への移行の可能性」『日本語とジェンダー』第17号日本語ジェンダー学会　14-30.

[参照資料]

朝日新聞　朝日新聞クロスサーチ・フォーライブラリー.
信濃毎日新聞 2022年３月２日.
毎日新聞　毎策.
読売新聞　ヨミダス歴史館.
読売新聞オンライン（yomiuri.co.jp）　https://www.yomiuri.co.jp/national/20220420-OYT1T50132/　2022年11月15日閲覧.
日経電子版20210823　https://style.nikkei.com/article/DGXMZO74438480T00C21A8000000?page=2202　2022年11月15日閲覧.
マイナビ　ウーマン20220616　https://woman.mynavi.jp/article/190413-14/2/　2022年11月15日閲覧.
VERY　雑誌オンライン版 20200918　https://veryweb.jp/life/116600/　2022年11月15日閲覧.

（えんどう　おりえ・元文教大学教授）

Copyright © 2023 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.